

現代ナショナリズム研究のための理論的視座

——メディア技術の変容に注目して

新倉 貴仁

はじめに

吉野耕作の『文化ナショナリズムの社会学』（1997）は、日本におけるナショナリズムの社会学の古典的研究であるといえる。同書は、1970年代以降の日本論・日本人論の消費を、「政治ナショナリズム」とは異なる「文化ナショナリズム」として、実証的に探求した。吉野は、書物を読む無数の人々にアプローチをし、知識人というよりも知識階級（あるいはミドルクラス）に焦点をあて、言説の消費と再生産のプロセスに着目している。このアプローチは、後述するように多くの研究に引き継がれ、いまなおナショナリズム研究の一つのモデルであるといえる。だが、同時に、吉野のアプローチは、その方法論にもっとも適した時期を対象としていたと考えることができるかもしれない。1980年代後半は、インターネットの本格的な到来以前の時期であり、日本の出版市場自体が拡大している時期であった。消費社会がひろがり、「政治」から切り離された「文化」の概念には、かつての強い規範的な意味が失われている¹⁾。とはいえ、グローバル化、情報化はまだこれからである。

それでは、情報化とグローバル化を特徴とする現代社会におけるナショナリズム、すなわち現代ナショナリズムを社会的に考察するために、どのような理論的視座が求められるであろうか。本論文では、とりわけメディア技術との関係を手がかりに、この問いに答えることを目指す。

本論文が主張することは、以下の点である。第一に、ナショナリズムは、歴史的な文脈の中でその特徴が捉えられる必要がある。第二に、ナショナリズムの核心として、技術の問題を捉える必要がある。現代社会におけるナショナリズムは、1960年代まで、「思想」として「知識人」たちが活字で紡いでいたものと異なり、無限の複製のなかで増殖していく情報の羅列へと変換しつつある。

1. 1960年代後半から1970年代の日本社会とナショナリズムの変容

1970年前後にナショナリズムに関わるさまざまな主題が大きく変容したことは、すでに多くの論者が指摘することである。たとえば、小熊英二は、『〈1968〉』のなかで、のちに「差異の政治学」と呼ばれるようなマイノリティに関する問題の出現を、「1970年代パラダイム」と呼んだ。小熊はまた、「単一民族神話」についても、1970年代以降に集中的に観察されることを述べている²⁾。

この変容は、左派が扱う主題や視角の問題にとどまらない³⁾。上丸洋一が、『『諸君』『正論』の研究』のなかで論じるように、1970年前後は右派論壇の形成の時期にもあたる。1968年、田中美知太郎を中心として、日本文化会議が発足する。同年の明治100年祭を経て、1969年には『諸君』が創刊し、

1973年には『正論』が創刊している。

この時期は、吉野（1997）が「文化ナショナリズム」として考察した、「日本論」「日本人論」のブームがあった。1970年には、イザヤ・ベンダサン（山本七平）の『日本人とユダヤ人』が出版され、1971年には、土井健郎の『「甘え」の構造』が出版されている⁴⁾。青木保は、1990年に出版された『「日本文化論」の変容』のなかで、戦後における日本論および日本人論の展開を扱い、1964年ごろから「肯定的特殊性」と呼ばれる類型が出現してきたことを述べている⁵⁾。これ以降、日本人論あるいは日本文化論の議論が続々と生み出され、「大衆消費財」として消費されるようになる。

1970年代は、戦前から戦争をはさんで高度成長期まで続いてきた、人口増加と都市への人口流入が落ち着き、二重構造の解消がいわれるようになった時期である。「三種の神器」と呼ばれた主要な耐久消費財の普及率は9割を超え、核家族化が進行する。過疎と過密が問題となりながらも、地方と都市の格差が相対的に低下した時期であった。

高度成長を通じた消費社会化の進展が、1970年代以降の左右の論壇の成立、現代ナショナリズムの登場の背景となっている。その一つの特徴は、ナショナリズムの商品化ともよべる現象である。実際、出版の統計をみても、出版産業は1970年代前半に書籍、雑誌とも急速な伸びをみせ、1996年まで上昇をつづける（図1）。書籍新刊の出版点数も同様に著しく上昇していく（図2）。

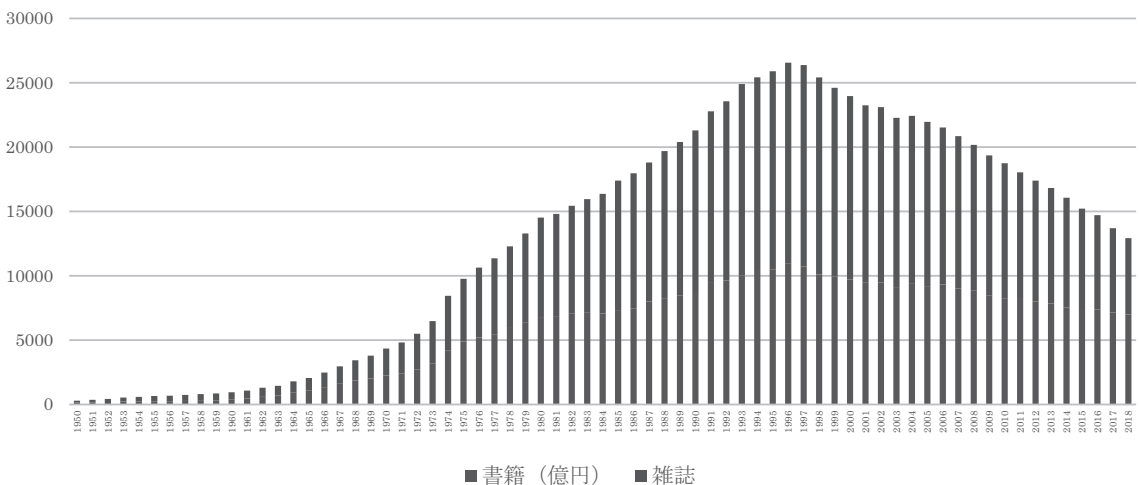


図1 取次ルート経由の出版販売額の推移
『出版指標年報 2019 年度版』より作成

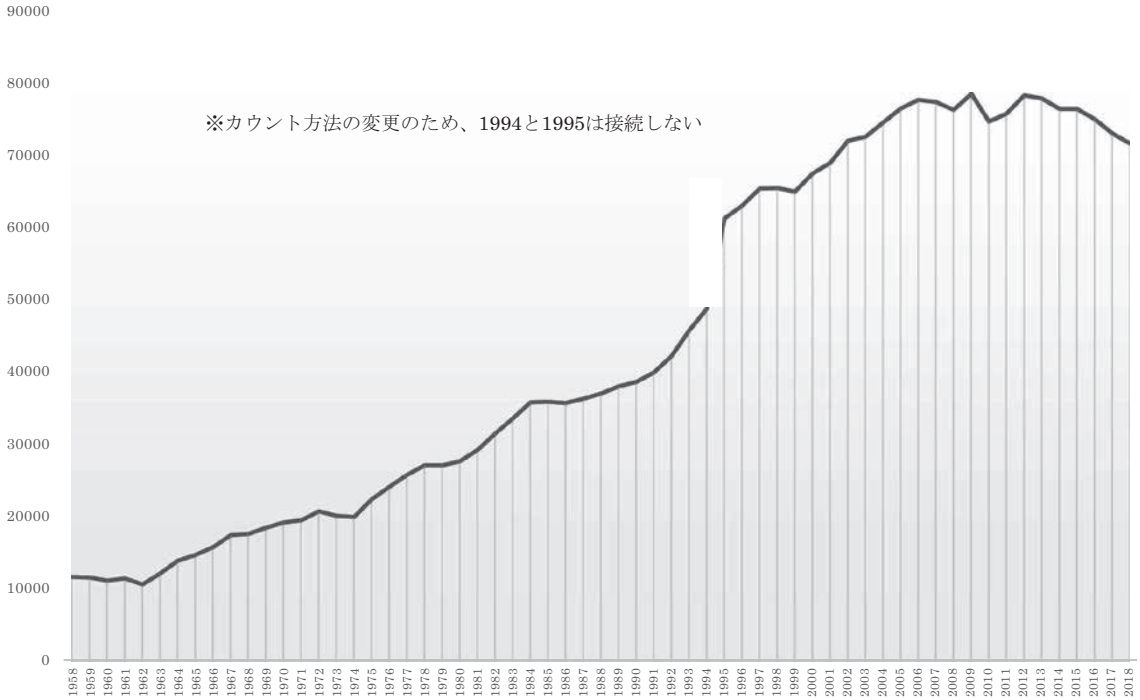


図2 書籍新刊出版点数の推移
『出版指標年報 2019 年度版』より作成

2. 現代ナショナリズムについての先行研究

このような社会変容を背景とした吉野（1997）の仕事は、その後のナショナリズムの実証的研究を導くものであった。1990年代後半の「新しい教科書を作る会」が活動し、2000年代以降には排外主義が大きな主題となり、ナショナリズムと目される現象はひろがっていった。

たとえば、小熊英二と上野陽子による『〈癒し〉のナショナリズム——草の根保守運動の実証研究』（2003）はそのような実証研究の一つの例であろう。また研究書というカテゴリーからは外れるかもしれないが、安田浩一による『ネットと愛国』（2012）も「聞き取り」というアプローチでは共通するといえる。

くわえて、樋口直人の『日本型排外主義』（2014）や、山崎望編の『奇妙なナショナリズムの時代』（2015）、倉橋耕平の『歴史修正主義とサブカルチャー』（2018）や伊藤昌亮の『ネット右派の歴史社会学』（2019）など、吉野の仕事の延長に位置づけることができる優れた研究が発表されている。

もちろん、これらの論考は扱っている対象、時期、採用する方法、視角において多様である。ここでは、これらの個々の著作を言及するのではなく、やや乱暴に現代ナショナリズムを扱う論考を想定したうえで、自身も共有している課題について述べてみたい。

一つの問題として、扱っている対象をなおもナショナリズムと呼ぶべきかどうかという問いが残る。ベネディクト・アンダーソンは、『想像の共同体』のなかで、レイシズムを植民地主義に由来するものとして論じた。1990年代後半以降、中国・朝鮮への批判の集中はそのようなレイシズムの特徴を備え

ているといえる。他方で、1960年代以前のナショナリズムにより色濃くみられた共同体を構想するという志向はあまり感じられない。

もう一つの問題として、樋口（2014）が指摘するように、これらの運動を、「持たざるもの」の怨嗟として分析することは十分ではないことがあげられる。すでに多くの研究が明らかにし、また新聞等の報道でも明らかになっているように、これらの運動の担い手は、下層に集中しているのではなく、階層、学歴、年齢で散らばりをもっている。端的に、階層や階級といった従来の社会科学のカテゴリーでは補足できない担い手の多様性がある。それらを、どこまで集団として扱うことができるか。断片化、細分化したものの偶有的集合であるとする、経験からの一般化はかなり困難になるのではないだろうか。

もちろん、その担い手を、孤独な個人（＝つながりをもたざるもの）とし、サブカルチャーの一部ととらえる議論もありうる。だが、疎外とナショナリズムは18世紀末まで遡る主題である。さらに、単身者化は、日本社会における大きな趨勢の一つである⁶⁾。孤独という属性からナショナリズムを導くことには慎重でなければならないであろう。そもそも「単身者化」が何を意味する現象であるのかということとは別途問われなければならない問題であろう。

2000年代に生じた格差社会をめぐる言説は、同時期のナショナリズムの広がりや、社会的不平等の拡大にともなう思想的表現とみなす言説を生み出した。その一つの例として、2006年末に発表された赤木智弘の文章がある。そのタイトルは、「丸山眞男」をひっぱたきたい—31歳、フリーター。希望は、戦争。」であった。「格差社会」が広く論じられるなかで発表され、若者の「右傾化」としても議論を呼んだ。

だが、すでに述べたように、2000年代のナショナリズムは、かつてのような資源の稀少（＝もたざるもの）ゆえに逸脱を行うという疎外論モデルは有効ではない可能性がある。もちろん、個別の経験における不安は非常に重要である。だが、それが情報社会のなかで生じているとき、つまり情報技術の進展に相関した現象であるとき、従来の産業社会（工業化社会）のなかで有効であった議論によって、あるいは従来の機械的再生産のなかで有効であった議論によって、その救済が構想されうるであろうか？

私たちは現代ナショナリズムに関するアプローチをあらためて考え直す必要がある。もちろん、実践的には、イデオロギーの真偽の判定や、対抗言説の生産それ自体は重要である。だが、このような「思想」をめぐる方法論とは別に、異なるアプローチが必要なのではないか⁷⁾。そのとき、メディア論的考察は一つの補助線となるのではないか。メディア論とは、メッセージの「内容」や「形式」ではなく、それを可能にする具体的な技術（「技術の物質性」）に注目する視座であると考えられる。書物に書かれた内容よりも書物という存在や書字の生産を生み出す条件に注目するように、現代ナショナリズムにおいては、コピペされる内容ではなく、コピペの行為やそれを技術的に可能にする条件を考えていく必要があるのではないか。

3. メディアとナショナリズム

ナショナリズムとメディアの関係は、近年の現代ナショナリズム論の一つの特徴でもある。ここでは、その批判的検討を通じて、本論文が提示する視座をより明瞭にしていきたい。

現代ナショナリズムについて、「メディア」の観点から分析した優れた業績として、倉橋（2018）を挙げることができる。倉橋（2018）は、1990年代の日本の保守言説をヘンリー・ジェンキンスの概念を援用して、「コンバージェンス文化」として捉えることを提起している。「コンバージェンス文化」とは、「複数のメディア・プラットフォームが集中していくこと（convergence）、それに人々が参加していくこと（participation）、そして集合的な知（collective intelligence）が形成される」ことを特徴とする（倉橋 2018：29-30）。それは、「複数のメディア・プラットフォームをまたぐコンテンツの流通であり、マルチメディア産業の間で同時に文化現象が生じていき、消費者がその過程で多様に振る舞う現象を分析するための概念」となる（倉橋 2018：30）。

ここで注目したいことは、倉橋が「コンバージェンス」について、デジタル技術による統合という側面よりも、社会的な多様性や関係性の側面を強調していることである⁸⁾。特に、倉橋は、技術決定論を回避すべく、技術的発展の側面を意図して切り落としている。だが、ここで立ち止まるべきことは、技術的発展もまた重要なのだということである。たしかに、ジェンキンスの議論は技術決定論を回避する志向をもつ。とはいえ、その副題は「オールドメディアとニューメディアが衝突するところ」であり、デジタル技術の到来を議論の前提としている⁹⁾。倉橋がより注目する送り手と受け手（消費者）の関係の複雑化は、確かに興味深い現象であり、保守言説においてよく観察されるものであろう。しかし、その背後にはメディア技術の変容がある。重要なことは、それが新しいメディア技術の到来が引き起こした文化を構成する論理そのものの変化を考察することなのではないだろうか。

倉橋が主に取り扱う1990年代は、出版市場の最盛期にあたる。その意味で、1990年代の歴史修正主義は、出版文化の一つの到達点をあらわすとも考えられる。だが、2000年代以降、出版の販売金額は急速に減少していく。そのうえ、この市場の収縮のなかで、書籍の新刊点数だけが、出版全盛期を超える高水準にとどまっている。とりわけ現代ナショナリズムを考えるうえでは、1990年代からの連続と同時に、このような出版をとりまく状況の変化を考える必要があるのではないか。そして、そのような変化は、間違いなく、倉橋自身も序章や終章で示すように、インターネットの普及が背景となっている。このとき、私たちは、技術の問題を回避するのではなく、技術決定論と論難されようとも、その方向でいけるところまで考えてみる必要があるのではないか。

4. 新しいナショナリズムと新しいメディア

2017年10月18日の『毎日新聞』には、「衆院選 安倍首相に熱狂 投稿内容は「自己責任」 自民公認サポーター組織 会員数1万9000人で「宣伝戦」という記事が掲載される。2017年10月9日の『東京新聞』には、「偽ニュース要注意 「一本800円」保守系ブログの記事募集 世論工作狙い？ 衆院選で横行も」という記事が掲載される。

このような報道が明るみに出すことは、なによりも言説の生産の条件が全く変わってしまっているということである。もはや、情報の生産において、書物は独占的ではない。出版産業や編集の文化が備えていた言説の稀少化のメカニズムは衰退している。情報技術はなによりも、言説の生産量と流通量を飛躍的に拡大させる。それにともない、書物を通じた主体化（読書と個人）は、情報技術を通じた主体化

(たとえばレーティングの重視)に変わりつつあるのではないだろうか。

このことを示唆するのが、樋口直人らの共著『ネット右翼とは何か』(2019)に収録された、シェーファーらによる議論である。この研究は2014年の総選挙におけるソーシャルメディア上でのbot(「自動的に投稿, ツイート, メッセージを残すコンピュータ処理のプログラム」(樋口他 2019:135))の作用を示した非常に重要な研究である。同時にこの研究は、もう一つ重要な指摘をしている。すなわち、「普通のユーザーはソーシャルメディア上で非常に狭い活動しかしていない。これはソーシャルbotがおこなう定められた行動と大きな違いはなく、少ない選択肢のなかで利用しているといえる。プラットフォームのインフラが狭くできているため、人間のユーザーの行動がこれに適応し予測可能になったからこそ、botが容易にそれをまねることができる」という指摘であり、「[「人間の行為者」の行動がよりbotに近くなるとしたら、ユーザーとbotの行動は徐々に収斂して区別がつかなくなるであろう」(樋口他 2019:148-149)という指摘である。これらの指摘は、botが人間を模倣できるほど高度化したことと同時に、botが人間の行為者を模倣できるくらいに、人間の行為者がbot的ふるまいを行っていることを示唆している。とするならば、現代ナショナリズムを考えるうえでの一つの手がかりは、botと人間の行為者の双方に共通する態度や行動の論理を明らかにすることではないだろうか。

5. マクルーハンのメディア論とナショナリズム

ここで、そもそも技術決定論とはいかなるものなのか、すこし考えてみたい。もちろん、技術に内在する特性がそのまま社会の性格を決定するという議論もあり、そのような議論に対して、技術決定論批判は重要であり、有効であろう。

だが、同時に、技術の物質性に照準し、技術のポテンシャルを探究する議論を、技術決定論として批判することは、あまり生産的ではないと思う。このような技術そのものの社会性に照準する議論こそが、メディア論と呼ばれる議論の特徴である。メディア論は、知覚と見解の配置、感覚の諸比率の変化を扱い、さらには人間そのものの変化を扱う議論なのである。技術とは、ここでは、人間の知覚を形成する諸力なのである。しばしば技術決定論者として論難されるマーシャル・マクルーハンは、技術を扱う理由は次のように述べる。「だが、われわれが創り出した技術 technology に内在する因果関係や効果に対する無知からはただ悲劇しかもたらされないであろう」(McLuhan 1962=1986:384)。

技術をこのような主題として考えていくとき、ナショナリズム論のいくつかの系譜は、まさにこの技術とナショナリズムの関わりを扱ってきた。ベネディクト・アンダーソンは『想像の共同体』のなかで、慎重に決定論的な記述を避けながらも、「出版資本主義」に大きな要因を見出している。また、マクルーハンは『ゲーテンベルクの銀河系』のなかで、よりはっきりと、また大胆に、ナショナリズムと複製技術を結びつけて論じる¹⁰⁾。たとえば、「個人主義とナショナリズムの力学は写本という文化様式のなかでは開花するにはいたらず、ただ潜んでいただけであった」(McLuhan 1962=1986:88)。また、「印刷という熱い媒体によって、人間ははじめて自分が話している民族語を文字のかたちで「見る」ことが可能になったからであり、かつそうした言語が話されている地域という観点から、国民的統合や国力が頭に描かれはじめたからである」(McLuhan 1962=1986:212-3)。

マクルーハンの『ゲーテンベルクの銀河系』は、特にその後半において、ナショナリズム論としての性格をもっている。もう一つ、この書物からひきだされる重要な論点は、印刷術を大量生産技術の原型として捉えていることである。「印刷本は史上初の大量生産物であったが、それと同時にやはり最初の均質にして、反復可能な〈商品〉でもあった。活字というばらばらなものを組みあげるこの組み立て工程こそが均質で、かつ科学実験が〔他者の手によっても〕再現可能なように再現可能な〔活字を崩しても再びそっくりそのままに組むことができる〕製品を可能にしたのである」(McLuhan 1962=1986: 193)。

マクルーハンは、ベネディクト・アンダーソンに先駆けて、印刷術と資本主義、ナショナリズムの結びつきを論じる。その議論はさらに人びとの生や知の様式を変容させるものとしての印刷術という議論に向かっていく。そのときに注目されているのは、いわば、印刷という技術に内在している論理である。それは『ゲーテンベルクの銀河系』で繰り返される、「均質性、画一性、反復性」であり、あるいは「視覚的画一性と反復可能性」であり、あるいは「画一性、連続性、反復可能性」(McLuhan 1962=1986: 280)である。このような論理が、社会そのものの編成の隠れたロジックとなる。マクルーハンは、「印刷は中央集権的に組織化された大量生産の一形式である」(McLuhan 1962=1986: 359)と述べ、組織(例えば軍隊)や社会、想像力の編成を論じる。それは、書物の生産、知の生産、言説の生産を貫く共通の論理なのである。それはまた、人々がどのように世界や自己と他者の関係を考えていくかという知にかかわるものであり¹¹⁾、時間・空間の組織化を導くものである¹²⁾。

このように印刷術に内在する論理が人々の知覚の様式を変えていくという議論は、ベネディクト・アンダーソンのナショナリズム論に引き継がれている¹³⁾。『想像の共同体』後に出版した論文集は『比較の亡霊』というタイトルを持ち、そこではナショナリズムの根源に「比較」という知の在り方が関わっていることが示唆される。それは、一方で、『想像の共同体』の増補版で展開されたグリッドとシリーズという考えを発展させるものであり、他方で、『想像の共同体』のなかですでに展開されていた「複数形の行列」という考え方を発展させるものである。

このように整理をするとき、当然のように次のことが疑問に浮かぶ。印刷術が大量生産にまでいたる、人間の生や知、時間や空間を編成する技術的条件であったとすると、現代の大量生産技術はいかなる人間の生や知、時間や空間の編成を可能にするものであるのか。印刷術という産業社会の成立を導いた技術とは別の、「ポスト産業社会」の技術を考察する必要があるのではないか。

6. レフ・マノヴィッチの「ニューメディア」論

複製技術の変容がどのように人々の知の様式や時間や空間の編成に作用を及ぼしたのかということを考えるにあたって、レフ・マノヴィッチの『ニューメディアの言語』(2001)に注目したい。「ニューメディア」という表現は、陳腐で古びた表現に聞こえるかもしれないが、マノヴィッチがあえてその名で名指そうとすることは、コンピュータを媒介としたメディアが主流になりつつある現在の事態を言い表すためである。

ちょうど14世紀の印刷機や19世紀の写真が近代の社会と文化の発展に革命的なインパクトを与えたのと同じように、今日私たちはニューメディアによる革命の真っ只中にある……つまり、文化がことごとく、コンピュータを媒介にしてなされる制作、配布、コミュニケーションの形態へと転換しつつある (Manovich 2001=2013: 59)

マノビッチもまた、先のフリードリッヒ・キットラーやジェンキンスのコンバージェンス文化の議論で言われるような、デジタル技術による多メディアの統合について論じている。同時にマノビッチがそこで強調することは、それらのデータが数値化され、計算によって処理される対象となったということである。このことは、テキスト、グラフィックス、動画、音声などあらゆることに及ぶ¹⁴⁾。マノビッチは、なによりもコンピュータが、産業生産のシーンを超えて、文化の生産に深く関わるようになったことを重視している。

ニューメディアとは、視覚的メディア+計算機メディアの融合であると考えられる¹⁵⁾。それは、1980年代以降のグラフィカル・ユーザー・インターフェイス (GUI) をもったコンピュータの普及が促進したものである。マノビッチ自身は、コンピュータグラフィックの分野で活動した経験もち、映画研究をみずからの理論的バックグラウンドとしている。

メディアが計算可能なデータとなった (デジタル化) したことを通じて、ニューメディアにおけるさまざまなオペレーションは、「コンピュータ時代における全般的な作業の仕方にして、思考様式でも、存在の仕方」となり、「私たちが自分自身や、他者や、世界を理解する仕方」(Manovich 2001=2013: 183) となる。それは、印刷術の均質性、画一性、連続性、反復可能性がヨーロッパの文化にもたらしたものに匹敵する。

ここでマノビッチがあげているいくつかの効果について述べていこう。

第一に、「対象の並列化 (フラット化)」がある。それは、現実であれ、写真であれ、絵であれ、音楽であれ、動画であれ、すべて素材として扱い、複製され、貼り付けられ、編集されることを意味している。

第二に、その編集が、「あらかじめ定められた (プログラム化された) メニュー」からの選択であることがあげられる。私たちが日々、PC やスマートフォンのアプリケーションで経験するように、選択候補のメニューから選び、出来合いのパーツから組み立てられる (Manovich 2001=2013: 193)。作品は、ライブラリやデータベースからの選択、引用、再構成によってうみだされる。

第三に、「合成」という効果がある。これは、見せかけの現実を作り出すことのできる能力である。特に、デジタル合成により、実在しない世界の動きのある映像を作り出すことが可能になった。

そして、第四に、「テレプレゼンス」という効果をあげることができる。それは、物理的な現実を、その画像を介して、リアルタイムで遠隔操作する能力を意味する (Manovich 2001=2013: 244)。これによって、みせかけの現実を制御することが可能となる。

マノビッチは、映画そのものに生じた変容から「ニューメディア」への変容を説明してくれる。たとえば、『ジュラシックパーク』や『タイタニック』といった1990年代の大作を想起しよう。20世紀に

において主流であったフィクション映画は、主として、現実の物理的空間で起こった現実の出来事の、修正を施されていない写真的記録から成っていた。だが、3Dアニメーション、デジタル描画プログラムによって、実際に撮影されていなくても完璧な写真的信憑性を備えたものに加工できるようになる。この結果、映画は、手で書かれるという19世紀以前の前映画的实践に回帰していく。アニメーション映画や特撮といった、周縁に追いやられていたものが主流となり、映画は絵画に近いものとなる。それをあらわすのが、プロダクションに対するポストプロダクションの時間の増大である。

だが、以上のような推移は、映画というあるメディアの中で生じた変化というだけではない。むしろ重要なことは、20世紀において映画がリアリズムを形成するうえできわめて大きな力を持っていたことを考慮することである。すなわち、映画における変容は、人びとのリアリティについての変容に深く関わっている。

ニューメディアの時代におけるリアリティは、フェイクであろうがリアルであろうが情報を素材として収集し、合成する。また、そこにはさまざまな効果が、あらかじめ定められた選択にしたがって加えられる。現実とは記録される対象ではなく、操作され、合成される対象となる。そしてその素材はさまざまなリンクを持ち、無数に増殖していく。そしてそれらを可能にするものがコンピュータによる計算であり、制御である。

おわりに 「ニューメディア」とナショナリズム

1970年代以降のナショナリズムは、機械的再生産、大量生産のモデルでは十分に理解できない。現代ナショナリズムは、それ以前のナショナリズムを模した何かに変わっている可能性がある（ネーションなきナショナリズム）。現代ナショナリズムは、イデオロギーの分析を通じて、個人の動機の分析を通じて、十分に理解できないかもしれない。なぜなら、イデオロギーも、個人も、そして批判も、印刷術＝機械的再生産という技術的条件のなかで登場してきていると考えられるからである。

1970年代以降、高度成長期後に日本に成立したと考えられる現代社会は、消費社会化と情報化を特徴とする。もはや機械的再生産ではなく、情報技術を通じた再生産の段階に至り、管理＝制御 control が主題となる。そのような管理＝制御のなかでは、イデオロギーも、個人も、批判も姿を変える。

現代ナショナリズムは、このような技術の変容にともなう現象として考えられなければならないのではないか。とするならば、イデオロギーとしての真偽を競うのではなく（もちろんそのような営みは重要であるのだけれども）、また、社会的、経済的不平等を引き起こすものとして論じるだけではなく、その言説の生成の技術的条件を考える必要がある。

現代ナショナリズムの言説は、そもそも「メッセージ」ではない可能性がある。また、動機を持たない可能性がある（動機にもとづく人間学を越え出ている可能性がある）。ひたすらにコピー（サンプリング）が重ねられていく状況や、そのような技術と技術が可能にする言説空間の構造変容（イデオロギーの内容が変容したということではない）こそが、現代ナショナリズムを分析するための手がかりになるのではないか。

しかし、だとすればナショナリズム研究は、シェーファーらのようなビッグデータの解析に譲られる

のであろうか。私たちはまだ吉野が展開したようなアプローチで、さまざまな事象に光を当てることができる。ごく当たり前の結論でしかないが、相補的な分析が求められるのであろう。同時に、私たちは現代ナショナリズムをより広い社会的文脈の中に位置づけて、さまざまな事象との比較研究をすすめていく必要があるのではないか。ここで論じたリアリティの変容やその操作は、ナショナリズムに関わらないように思える場面にも存在し、その奥深い根のところに通じていると思われるからである¹⁶⁾。

追記：

本論文の内容は、2017年10月20日に早稲田大学で行われた「共生と想像のスタイルに関する研究会」での研究報告、2020年6月28日にオンラインで行われた「国家論研究会」での研究報告に基づく。発表の機会をいただいたこと、貴重なコメントを寄せていただいたことに感謝申し上げます。また、本論文は、成城大学特別研究費「研究課題：データ社会の歴史社会学——新自由主義と情報技術の交錯に注目して」の成果の一部である。

注

- 1) 吉野の論文「消費社会におけるエスニシティとナショナリズム——日本とイギリスの「文化産業」を中心に」は、『社会学評論』176号（1994年第44巻第4号）に収録されたものだが、そのときの特集が、「情報化社会の中のエスニシティ」である。この特集に寄せられた他の論文のタイトルと著者は以下のとおり。「特集「情報化社会の中のエスニシティ」よせて」（梶田孝道・町村敬志）、「エスニックの意味と社会学の言葉」（宮原浩二郎）、「脱工業社会とエスニシティ——「遠隔地ナショナリスト」と新人種差別」（関根政美）、「エスニック・メディアの歴史の変容——国民国家とマイノリティの20世紀」（町村敬志）、「情報化は多文化化を可能にするのか？——多文化化と情報化された文化」（川崎賢一）、「グローバリゼーションをめぐる4つのテーゼ——グローバル・ローカル・モデルの社会的意義とその可能性」（小川葉子）
- 2) 小熊（1995：3）
- 3) むしろ、現在に至るような左右の対立自体がこの時期に形成されたと考えることができるかもしれない。
- 4) 山本（1970）、土井（1971）
- 5) 青木（1990）
- 6) 2015年の国勢調査では、人口が1億2,709万人となり、2010年度から96万人の減少であった。人口減少は、国勢調査史上初のことである。また、1世帯当たりの人数の全国平均は、2.33人であり、東京では1.99人となった。
- 7) メディア研究とするならば、新聞や出版とネットといったメディア産業間の布置から、インターネット上の言説を位置づけることは、ある程度可能と思われるし、またそのような仕事は重要であるとも思われる。それはまた、出版史や論壇史と政治思想史を組み合わせるような作業となるであろう。だが、その説明は文化資本の多寡や言説の正統性をめぐって、支配／被支配や収奪といった従来のマルクス主義的な議論の枠組みを援用するものになりかねない。貧しいからと、経済資本の稀少の効果としてネットの言説を分析する立場も、寂しいからと、正統性や承認の稀少の効果としてネットの言説を扱う言説も、欠乏の充足というモデルを展開することになる。だが、その種の欲望が、現代のナショナリズムを駆動しているのだろうか？
- 8) 「コンバージェンスは、メディア技術の変化・刷新やメディア技術・統合によるデジタル技術やインター

ネットのように、テキスト・音声・動画などの多様なメディアが単純に一つの技術にまともっていくことを指すのではない、コンピュータやインターネットの登場によって、ほかのメディアが駆逐されるわけではないからだ。ジェンキンスがこの語を使う意図は、単なる技術的發展以上のものである。デジタルメディアと守旧のメディアは相互にバランスを変えながら社会に存在し続けているので、むしろ、文化そのものを変化させる。そのプロセスを描き出すための枠組みとしてジェンキンスはコンバージェンス文化という概念を提起している」(倉橋 2018: 30)

- 9) 「コンヴァージェンス文化によろこそ。ここは古いメディアと新しいメディアが衝突するところ。ここは草の根メディアと企業メディアが公差するところ。ここはメディアの制作者とメディアの消費者が持つ力が前もって予見できない形で影響し合うところだ」(Jenkins 2006=2021: 24)
- 10) マクルーハンのナショナリズム論については、新倉(2016b)を参照。
- 11) 「人間が自分のすべての経験、あらゆる活動を線形システムにもとづいて再組織化してゆく営みを教示するものとしての印刷術」(McLuhan 1962=1986: 212)
- 12) 「大量の印刷物が豊富に出廻り、そうした印刷物から新たな時間・空間の組織化が派生した」(McLuhan 1962=1986: 373)
- 13) アンダーソンの議論については、新倉(2016a)を参照。
- 14) 「既存のあらゆるメディアが、コンピュータを通じてアクセス可能な数字データに翻訳されるのである。その結果が、ニューメディアである——グラフィックス、動画像、音声、形状、空間、文章は、計算可能となった」(Manovich 2001=2013: 60)
- 15) 「ニューメディアが、コンピュータ計算とメディア・テクノロジーという2つの別々の軌跡が収斂する地点である」(Manovich 2001=2013: 60)
- 16) 新倉(2019)では、フーコーの「企業化」の概念を参照しながら、ミドルクラスの変容を論じた。「企業化」は、現代のナショナリズムを考えるうえでも有効な視角となると考える。特にネオリベリズムの問題は、ニューメディアと現代ナショナリズムを考えるうえで、もう一つの重要な頂点となると思う。なお、現代ナショナリズムの現象として、アメリカにおけるオルトライトは重要な対象と思われる。その分析として、Phillips (2015), Angela (2017), Neiwert (2017), Wendling (2018)などを参照。

文献

- 青木保, [1990] 1999, 『日本文化論』の変容——戦後日本の文化とアイデンティティ』中公文庫。
- Anderson, Benedict, [1983] 1991, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London; New York: Verso. (=1997, 白石さや・白石隆訳『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』NTT出版。)
- , 1998, *The Spectre of Comparisons: Nationalism, Southeast Asia and the World*, London: Verso. (=2005, 糟谷啓介・高地薫他訳『比較の亡霊——ナショナリズム・東南アジア・世界』作品社。)
- 樋口直人, 2014, 『日本型排外主義——在特会・外国人参政権・東アジア地政学』名古屋大学出版会。
- 樋口直人・永吉希久子・松谷満・倉橋耕平・ファビアン・シェーファー・山口智美, 2019, 『ネット右翼とは何か』青弓社。
- 伊藤昌亮, 2019, 『ネット右派の歴史社会学——アンダーグラウンド平成史1990-2000年代』青弓社。
- Jenkins, Henry, 2006, *Convergence Culture: Where Old and New Media Collide*, New York University Press. (渡部宏樹・北村紗衣・阿部康人訳, 2021, 『コンヴァージェンス・カルチャー——ファンとメディアがつくる参加型文化』晶文社。)

- 上丸洋一, 2011, 『『諸君!』『正論』の研究——保守言論はどう変容してきたか』岩波書店.
- 倉橋耕平, 2018, 『歴史修正主義とサブカルチャー——90年代保守言説のメディア文化』青弓社.
- Manovich, Lev, 2001, *The Language of New Media*, The MIT Press. (= 2013, 堀潤之訳『ニューメディアの言語——デジタル時代のアート, デザイン, 映画』みすず書房.)
- McLuhan, Marshall, 1962, *The Gutenberg Galaxy: The Making or Typographic Man*, University of Toronto Press. (= 1986, 森常治訳『ゲーテンベルクの銀河系——活字人間の形成』みすず書房.)
- Nagle, Angela, 2017, *Kill All Normies: The Online Culture Wars from Tumblr and 4chan to the Alt-right and Trump*, Zero Books.
- Neiwert, David, 2017, *Alt-America: The Rise of the Radical Right in the Age of Trump*, Verso.
- 新倉貴仁, 2016 a, 「『想像の共同体』を越えて」『思想』1108: 42-62.
- , 2016 b, 「『メディア論』再考——マクルーハンにおける産業社会とナショナリズムをめぐって」『コミュニケーション紀要』27: 1-11.
- , 2017, 『『能率』の共同体——近代日本のミドルクラスとナショナリズム』岩波書店.
- , 2018, 「情報社会化のなかの東京オリンピック——都市, 情報, 身体」石坂友司・松林秀樹編『一九六四年東京オリンピックは何を生んだのか』青弓社, 45-64.
- , 2019, 「中間層の空洞化」吉見俊哉編『平成史講義』筑摩新書, 219-244.
- , 2020, 「デジタル化する社会とオリンピック——ランニングと腕時計の大衆化に注目して」石坂友司・井上洋一編『未完のオリンピック——変わるスポーツと変わらない日本社会』かもがわ出版, 138-160.
- 小熊英二, 1995, 『単一民族神話の起源——〈日本人〉の自画像の系譜』新曜社.
- , 2009 a, 『1968 (上) ——若者たちの叛乱とその背景』新曜社.
- , 2009 b, 『1968 (下) ——叛乱の終焉とその遺産』新曜社.
- ・上野陽子, 2003, 『〈癒し〉のナショナリズム——草の根保守運動の実証研究』慶応義塾大学出版会.
- Phillips, Whitney, 2015, *This is Why We Can't Have Nice Things: Mapping the Relationship between Online Trolling and Mainstream Culture*, The MIT Press.
- 山崎望編, 2015, 『奇妙なナショナリズムの時代——排外主義に抗して』岩波書店.
- 安田浩一, 2012, 『ネットと愛国——在特会の「闇」を追いかけて』講談社.
- 吉野耕作, 1997, 『文化ナショナリズムの社会学——現代日本のアイデンティティの行方』名古屋大学出版会.
- Wendling, Mike, 2018, *Alt-Right: From 4chan to the White House*, Pluto Press, 2018

A Theoretical Perspective on Contemporary Nationalism in Japan: From Mechanical Reproduction to Digital Reproduction

NIIKURA Takahito

How can we understand contemporary nationalism in Japan? In other words, what kind of theoretical perspective will be required to grasp the characteristics of contemporary nationalism in Japan?

After rapid economic growth, Japanese nationalism has been transformed from an ideology aiming at the project of nation building into discrete messages concerning national identity. These changes have been catalyzed by the fact that the discursive production has been transformed due to the expansion of the domestic publishing market as well as the advent of Internet technologies.

To scrutinize this discursive transformation concerning nationalism, we need to focus not only on what the media transmit but on what the media enables us to produce. As Lev Manovich insists in his *The Language of New Media*, the increasing capacity of computation has radically changed the process of cultural production. It is no longer possible to understand discourses of nationalism by focusing on the intellectuals' ideology; instead, they must be understood by analyzing the exorbitant dissemination of information in the age of digital reproduction.